

中本たか子宛横光利一書簡について

——一九二六年秋、作家志望の若き教師に送った手紙——

加藤 禎 行

Yoshiyuki KATO

一、寄贈の経緯について

今回、資料紹介する中本たか子宛横光利一書簡は、二〇〇六（平成18）年一月一三日、中本たか子の妹にあたる御遺族島湯美喜子氏から、山口県立大学附属郷土文学資料センターに寄贈されたものである。この横光利一書簡の寄贈にあたっては、山口市在住の郷土文学研究家和田健氏および山口県文化振興課西村佳子氏に御尽力を頂いた。寄贈後、ただちに、同書簡は、二〇〇六（平成18）年二月一日から二六日まで、山口県立山口図書館二階特設コーナーにて開催された、「ふるさとの文学者13人 中本たか子」展示期間中、二月一日から七日までの七日間、本センターより貸出展示され、引き続き、本学の日本文化資料室においても、二月九日より二八日まで同書簡の小展示を行った。

また筆者は、小文「中本たか子宛横光利一書簡について」（『郷土文学資料センターだより』第7号、二〇〇六（平成18）年五月二日発行）で、同書簡の概要を簡単に報告する機会を得たが、紙数等の関係から書簡本文の全文紹介は行うことができなかった。河出書房新社刊行の『定本横光利一全集』第二六卷（一九八七年二月）、同補巻（一九九九年一〇月）等で確認したところ、同書簡は、全集等未収録の書簡で

ある。そこで本稿では、この中本たか子宛横光利一書簡の本文と写真版による書簡画像の掲載、そしてその解説を試みることにする。

二、書簡の形状等と書簡本文について

この書簡は、黄色の匡郭・野線を持つ二〇字二〇行の原稿用紙四枚（メーカー名等の情報なし）に、万年筆（黒色インク）で書かれる。そのうち一枚目から三枚目までは、原稿用紙中央からやや右寄りの上部に、アラビア数字で、「1」「2」「3」と通し番号が振られている。四枚目に通し番号は見られない。原稿用紙の大きさは、縦二六・七cm、横三九・〇cm。

封筒も残存しており、聖護院局による消印が読み取れる。消印日付は「15.10.24」とあり、一九二六（大正15）年一〇月二四日付。受付時間帯は「□—8」と、わずかに確認できる。封筒表には「山口県山口市片岡小路 中本たか子様」、封筒裏には「京都市下加茂宮崎町小松米店 横光利一」と、万年筆（黒色インク）で書かれている。封筒の大きさは、縦二六・七cm、横三九・〇cm。

以下に書簡本文を掲げる。翻刻に際しては、仮名遣いはそのまま旧仮名遣いとし、旧字体は固有名詞を除いて、新字体に改めた。また、

写真版を本稿と同時に掲げるので、改行位置については特に明示しないこととした。

御無沙汰いたしてをります。今、京都にをります。ここ暫く、と云つても多分今年いつばいは、出来ることなら来年の春頃まではこちらにゐたいと思つてゐます。ときどきは東京へ(月に一回位)出るかもしれませんが、今は東京にはゐたくありません。しなければならぬ用や仕事があります。取鳥、島根の方を廻りたいと思ひながらまだ行かないでゐます。ことによつたら、来月あたりひよつこり米子あたりから御通知を差し上げる破目になるかもしれません。家内が死んでからは手紙など殆ど書く気が起きませんのでどこへも出しません。このごろは淋しさなんか軽蔑しながらも、矢つ張り駄目で誰もゐない此の室へ帰つて来ると物の哀れを感じて日本人らしく一応はほんやりやつてみるのです。あなたが下すつた(文藝春秋へ)お手紙は三四本拝見しました。いつもながら愉快な皮肉ばかり云つておられるので「いい加減音無しくしてほしい」と微笑しながら呟きます。「野のとなり」と云ふのは拝見してあります。しかしあれはまだ「あく」がとれてない感じがありました。鉄兵も感心してゐました。しかし、私は、「曲玉」の方が好きです。「文藝春秋」から今度純文芸雑誌が出ますが、それには無名作家をどしどし紹介するさうですから、今からぼつぼつ勉強してをいて下さい。菊池氏や管には云つてあります。文藝時代にはいつでも出せるのですが、もうあの雑誌はいけません。原稿が出来ましたら矢張り鉄兵の所へ送つて下さい。彼にも此の間また話してをきましたから、とにかく、あせらないでしつかりやつて下さい。少し此の頃みがきが消えて来てはをりませんか。

今からだれてはいけません。あなたに愛人がおありならその人にすすめて東京へ出るやうになすつて、そして、あなたも東京へ出てゐらつしやればどうです。それでなければ、いつまでたつたつて駄目です。失礼ですが、もし就職とか何とか云ふことをお考へになつてゐられるのでしたら、そんなことはどうにでもなりますから。ほんとのことをきかして下さい。田舎にゐると東京にゐるのとがちがひます。田舎でひとり思ふ存分の読書をするということ、東京にゐて、何も讀まずに、人に接して人の云ふことを軽蔑するなり感心するなりしてゐることとは、後者の方が遙かに勉強になつてゐます。それともお家の方々が不賛成なんですか。田舎で幽閉なんかされながらジュリエットの真似をしてゐるのも華やかにがちがひありますまいがそれではあなたの歎息が気の毒です。

十月廿日

一人になるとますますズボラ者になつて行きます。手紙を書きましても切手がなかつたりすると出しに行くのがいやなので、三日も四日も机の上にのせたきりです。此の手紙も書いてから一週間以上にもなりますか。それでも、これはここ一二ヶ月の間に書いたただ一本の手紙です。あなたにだんだん逢ひたくなつて行きます。京都へ遊びにゐらつしやればいいのにとときどき思ひます。

横光生

隆か子様

たか子様

(字を間違ひましたから名を二つ書きました。此の一枚を書き直しますと、また一週間も遅れさうですからこれでお赦して下さい。

横光生

たか子様

三、書簡執筆の時期について

消印によれば一九二六へ大正15年一〇月二四日という投函日付、書簡本文によれば「十月廿日」という執筆日付を持つ本書簡だが、新感覚派の気鋭として知られた横光利一にとって、一九二六へ大正15年一〇月という時期は、どのような時期だったのだろうか。

一九二六へ大正15年、横光利一に関わる伝記上の事項として最も重要な出来事は「六月、二四日、神奈川県三浦郡逗子町小坪の湘南サナトリウムでキミ死去（享年二十三歳）。戸籍面への婚姻届出は七月八日。」（『年譜』『定本横光利一全集』第十六巻、一九八七年十二月、河出書房新社）と記述されるように、一九二三へ大正12年から同居生活を送っていた小島キミの死去であった。

この小島キミの死去と関連して、「妻」（『文藝春秋』一九二五へ大正14年一〇月）、「春は馬車に乗つて」（『女性』一九二六へ大正15年八月）、「蛾はどこにでもある」（『文藝春秋』一九二六へ大正15年一〇月）、「美しい家」（『東京日日新聞』一九二七へ昭和2年一月一七日）、「花園の思想」（『改造』一九二七へ昭和2年二月）と、病妻小説の系譜が、横光利一研究ではひとつの問題領域を形成している。

同時に、一九二六へ大正15年下半期の横光利一の居所と動静は、横光利一年譜における、かすかな空白をなしているようだ。井上謙『評伝横光利一』（一九七五年一〇月、桜楓社）による記述を確認しておく。

東京に戻った横光は、家がないので当時麹町（下六番町）の旧有島武郎邸にあつた文芸春秋社の一室を借りて告別式を行なつた。式は彼の希望で、僧侶も牧師も頼まない完全な無宗教葬であつた。

が、キミは横光の愛情と美しい献花、それに先輩や知友によつて手厚く葬られた。による告別式を行つた。七月八日、横光はキミとの婚姻届を出し同日入籍した。／「蛾はどこにでもある」によると、キミの死後、横光は一時彼女の実家（小島家）で暮らして、（中略）／横光は小島の家を出ると、菊池を頼つて、しばらくの間文芸春秋社の一室を借りて住んだ。彼はその一室で、キミとの愛と死を綴つた。それは苦痛に満ちた彼の青春であつたし、生々しい叫びはその青春の終りを告げる挽歌でもあつた。

「第六章 新感覚派時代」

また、『定本横光利一全集』第十六巻（一九八七年十二月、河出書房新社）に掲げられた横光書簡を確認しておくなら、一九二六へ大正15・昭和元年間の横光書簡は十七通で、そのうち十六通は、一月から六月までの前半期に書かれたものであり、後半期の書簡は、八月六日付岡村政司宛のもののみである。また『定本横光利一全集』補巻（一九九九年十月、河出書房新社）に掲げられた、一九二六へ大正15年間の横光書簡は二通で、これもまた、同年の前半期に書かれたものである。本書簡において横光が、「家内が死んでからは手紙など殆ど書く気が起りませんのでどこへも出しません」「これはここ一二ヶ月の間書いたただ一本の手紙です」と述べているのは、未発見書簡が存在する可能性と、未知の文学少女への修辞という側面を考慮しても、あながち誇張とも思われぬ。

すなわち、横光利一の一九二六へ大正15年下半期は、文藝春秋社の一室に住んでいたことになってはいるが、定まった自分自身の住居を持たなかつた時期であり、その動静を確認する一次資料である書簡も、十分に確認はされていないことになる。「今、京都にをります。ここ暫く、と云つても多分今年いつばいは、出来ることなら来年の春

頃まではこちらにゐたいと思つてゐます。ときどきは東京へ(月に一回位)出るかもしれませんが、今は東京にはゐたくありません。」という文言は、あくまで意向で、その修辭を鵜呑みにしてはならないが、少なくとも一九二六(大正15)年一〇月、横光利一は京都滞在中だった。封筒裏に記入された、「京都市下加茂宮崎町小松米店」という居所についての詳細は未詳である。

一方、やがてプロレタリア文学者として活躍する中本たか子にとつて、一九二六(大正15)年一〇月という時期は、どのような時期だったのだろうか。中本たか子研究における伝記的情報の蓄積は、横光利一と比較した場合、明らかに情報不足なのだが、小林茂夫「中本たか子小伝」(山口県郷土作家研究会編『甦る郷土の作家たち』四季出版、一九八八年一〇月)が素描した、中本たか子の初発を確認しておく。

中本たか子(本名タカ子)は一九〇三年(明治三十六年)十一月十九日、山口県の西北の響灘に浮かぶ小さな島、豊浦郡角島に生まれ、父は下士官からたたきあげたといわれる陸軍中尉で、退職後は山口中学校の体操教師をつとめたことがあります。たか子は六人兄弟の長女でした。／一九二〇年(大正九年)三月に県立山口高等女学校を卒業しました。

また女学校卒業後の中本たか子の詳細については、和田健「中本たか子年譜」(やまぐち文学回廊構想推進協議会編『やまぐちの文学者たち』同協議会発行、二〇〇六(平成18)年三月)に詳しい。この年譜によれば、一九二〇(大正9)年、県立山口高等女学校を卒業後、検定試験で小学校尋常科正教員の資格を得、一九二二(大正10)年一月、下関玉江小学校に勤務、一九二五(大正14)年六月、山口(下)野令小学校、一九二六(大正15)年三月、嘉川興進小学校に勤務して

いる。本書簡を受け取った時期は、嘉川興進小学校勤務時代となる。この時期、新潮社の投書雑誌『文章倶楽部』一九二五(大正14)年八月号には、中本たか子名義で書かれた懸賞当選作「日曜の食卓」の掲載、また無名作家紹介号と銘打たれた『文藝日本』一九二五(大正14)年一二月号にも、コント「予算」の掲載を確認することができる。一九二六(大正15)年一〇月、中本たか子は小学校教師として勤務するかたわら文壇デビューを目指す投書家であった。なお、封筒表に記入された、「山口市片岡小路」という地名だが、現在の山口市においても、一の坂川から山口県教育会館前へと続く小径の呼称として残存している。

四、書簡の内容について

本書簡は、中本たか子が文藝春秋社気附で横光利一宛に送った手紙に対する返信として、書かれている。中本たか子は、このような連絡方法をどうやって知ったのだろうか。日本年鑑協会編『文藝年鑑』(一九二五(大正14)年三月、二松堂書店)、文芸年鑑編輯所編『文藝年鑑』(一九二六(大正15)年二月、二松堂書店)の段階では、「文士録」掲載の横光利一住所は、ともに「東京市外中野町上町二八〇二」とされている。本書簡が発信された後の刊行だが、『文藝自由日記』(文藝春秋社出版部、一九二六(大正15)年一月)になると、巻末掲載「現代文芸家住所録(大正十五年十一月現在)」における、横光利一の現住所は「麹町区下六番町十文藝春秋社気附」とされている。もともと、本書簡からは、すでに複数回の書簡の往来があったことも窺えるし、「原稿が出来ましたら矢張り鉄兵の所へ送つて下さい」とあるように、片岡鉄兵もまた横光の窓口の役割を果たしていたようだ。

本書簡によれば、中本たか子は「野のとなり」「曲玉」というふたつの原稿を送り、横光に一読を乞うている。「野のとなり」についての詳細は未詳であるが、「曲玉」については、「アポロの葬式」(『創作月刊』一九二八(昭和3)年四月号)で文壇デビューを果たしたのち、『創作月刊』一九二八(昭和3)年一〇月号に同名の小説が掲載されており、必ずしも横光に送った草稿そのままが、『創作月刊』に掲載されてはいないだろうが、その行方を知ることができる。

書簡において提示された固有人名について簡単に確認しておく。

「鉄兵」は、新感覚派作家として登場し、のちに左傾しプロレタリア文学運動の担い手となった片岡鉄兵。「菊池氏や管」^{マツ}とあるが、「菊池氏」はもちろん『文藝春秋』経営者であった菊池寛。「管」^{マツ}は漱石旧友の菅虎雄を父に持つ菅忠雄。菅忠雄は、芥川龍之介、久米正雄、菊池寛といった第四次『新思潮』同人との交遊から文藝春秋社に入社し、『文藝春秋』編集者を務めており、『文藝時代』発起人のひとりでもあった。

「『文藝春秋』から今度純文芸雑誌が出ますが、それには無名作家をどしどし紹介するさうですから」とあるが、実際に、本書簡の翌年に文藝春秋社から新創刊された新しい文芸雑誌は、『手帖』(一九二七(昭和2)年三月創刊(一月終刊))であり、無名作家の紹介ではなく、既成作家による一ページ単位での自在な寄稿を掲載する、という性格の雑誌だった。無名作家の紹介雑誌として文藝春秋から雑誌『創作月刊』が創刊されるのは、もう一年遅れており、一九二八(昭和3)二月のことだ。しかしながら同誌のプランについては、早い段階から横光利一や菊池寛の周辺で、模索されていたことを知ることができる。その一方で、「文藝時代にはいつでも出せるのですが、もうあの雑誌はいけません」という、横光の何気ないコメントに伺える終刊間際の雑誌『文藝時代』評価も見逃すことができない。

さて、書簡後半では、横光利一は繰り返して、中本たか子に上京をうながしている。それはもちろん第一義的には、作家志望の教師を励ます言葉として書かれるのだが、それと同時に、「あなたに愛人がおありならその人にすすめて東京へ出るようになすつて、そして、あなたも東京へ出ておらつしやればどうです」と、仮定法を用いつつも、それとなく恋人の有無を確かめようとする文言や、時には「取鳥、鳥根の方を廻りたい」「京都に遊びにゐらつしやればいいのに」と、直接の面会の可能性を示唆する文言さえ、本書簡には見出すことができるのだ。

こうした横光の挙動不審な書き振りには、愛する妻を失ったあとで揺れ動く心情の機微と混乱とを察知してもいいだろう。元号が(大正)から(昭和)へと改元されたこの年の暮れ、横光利一は、「雑感 ひとりものについて」(『読売新聞』一九二六(昭和元)年二月二八日)という随筆を残している。

独身になつて一番困るのは、気候の変わり目である。私はつい先日まで夏の着衣で過してゐた。どこか仕立屋に一分間頼めば済みさうに思はれるのに、それが億劫なので、いつまでも捨てておく。すると、いつのまにか冬になつて了つてゐた。冬になつて、さてどうするだらうと自分を見てみると、まだ、ただ寒い寒いと云つてゐるだけである。／部屋でもどこか一つ定めようと思つてゐても、定めるとなると、蒲団を運んだり、机を持ち込んだり、知らない人に逢つたりしなければならぬことを思ふと、またいやだいやだと云ひたくなる。私はまだ一つの部屋さへ持つてゐない。私はどこでも仕事の出来る質ではない。メリヤスの二枚もぶかぶかを着込んで、憂鬱な顔をのびのびと二日ほどし通して、／「よし来た」と云ひ出すと、一寸紙と角力が取れさうになつて来る／

それに贅沢を云へば、どこか重心のしつかりした女が遠くの方で仕事をしてゐるのを見てみると、気持ちだが、明らかに落ちついて来る。／人はいろいろ幸福について贅沢な注文をしてゐるが、結局、家庭以外に、さう幸福はあり得るものではないと私は思つてゐる。今、市街戦では、家庭を持つてゐるものと、家庭を持たないものとの間に幸福の決定が白熱して、あの得体の知れない幸福の取り合をやつてゐる。所が、不幸なことにも、幸福と云ふ化物は団子であつたためしがない。

一九二六（昭和元）年の年の瀬、横光利一は、独身生活の不如意を愚痴り、居所も定められない境遇を嘆き、幸福な家庭生活への憧憬を独白している。前掲の井上謙『評伝横光利一』（一九七五年一〇月、桜楓社）は、翌年の『新潮』新年号（一九二七（昭和二）年一月）に掲載された横光利一「計算した女」を検討して、女主人公「お桂」について、「横光は、キミの死後、この「お桂」のモデルになった小里文子と恋愛をした。当時、菊池寛の周囲には若い作家や数多くの文学少女が入り込んでいた。文子もその一人である。」（第六章 新感覚派時代）と調査しつつ、この小説に、妻小島キミを失つた直後の横光の恋愛観および異性関係を見出している。この小里文子と横光の關係は結果的に破綻するのだが、井上謙は、その小説世界に描かれる、「幻影の中の死んだ妻」と対話する横光の葛藤、その内面世界を重視している。

こうした経緯を踏まえると、「あなたにだんだん逢ひたくなつて行きます。京都へ遊びにゐらつしやればいいのにとときどき思ひます。」という本書簡の横光の文言も、文壇ゴシップ的なスキヤンダラスな話題としてではなく、「紙と角力」を取る毎日を過ごす横光が、その原稿用紙を凝視するなかで、ふと見出してしまった、未知の文学少女の

幻影に対して、自問自答的に投げ掛けている言葉として、考えていく方が適切なのではないだろうか。

ともあれ、一九二七（昭和二）年三月、中本たか子は横光利一からの手紙に促されるように、上京を果たし、小説家となるための第一歩を歩み出す。同年四月五日、横光利一は菊池寛の媒酌で、日向千代と再婚し、同年五月には文壇に新感覚派の名を刻印した雑誌『文藝時代』が終刊している。このように本書簡が照らし出すのは、横光利一と中本たか子との年譜上を交点であり、そして、それぞれの作家の履歴を明らかにしていく作業に資するという点で、本書簡は、貴重な文学資料であると考えられる。

五、書簡以後について

本来、書簡の資料紹介としては、上記の叙述で時系列的に終了するのが適切だとも思われるが、本書簡以後の状況について、中本たか子の文壇デビューの翌年までを見通しつつ、簡単に素描しておきたい。

中本たか子の実質的な文壇デビューは、『創作月刊』（一九二八（昭和三）年四月）への「アポロの葬式」掲載によって果たされ、続いて本書簡でその草稿の存在が示唆された、「曲玉」（『創作月刊』一九二八（昭和三）年一〇月号）の掲載がこれに続く。横光利一「文藝時評」（『文藝春秋』一九二八（昭和三）年一月）は、自ら文壇へと仲介した無名の新人作家に対する援護として、「曲玉」を採り上げた。

曲玉（創作月刊）／中本たか子氏の曲玉は、女性にはあるまじき振前で、自然物を殆ど尽く、男性の変形に感じてゐる。電球の丸、きびの髯、茄子の触感、さうして最後に、首へ茄子を曲玉のやうにかけ連ねて踊りたいと願ふのだ。しかし、これがあまりに女性

らしき女性であるが故だと思はせる一方に、あまりに女らしからざる女性ではないかと思はせる所、そこが問題となつて、やがては八方に渦巻くであらう。しかし、私は、その問題は好色の患者にまかせるとしても、此の作者の観察力の警拔と、感覚の跳蕩と、思想の超俊とに、此の芸術の美しさを発見する。またその美しさは、茄子を曲玉と表現した所から、読者は自ら想像せられても、さして間違ひのない程度の美しさだ。われ／＼読者は、此の一篇からいかに羞恥を感じるとしても、常にわれ／＼は、野に川に、田園に、秋の風を感じて秀韻の高気をさへ養ふことが出来るであらう。もしそれが出来ない者であるならば、その者は、要するに好色の患者である。

横光利一に文芸時評で言及されるといった厚遇、支援を受けつつ、新進作家中本たか子はメディアのなかに、徐々に流通し始める。デビュー翌年、コラム「新人紹介(4)」(『読売新聞』一九二九(昭和4)年一月一日)では、顔写真入りで中本たか子の紹介記事が掲載されている。中本たか子は自身の「略歴」について、「一九二七年三月に上京して、或雑誌社にゐたこともありすが、現在では軟い職業に依つて口を糊しています。」と述べているが、これは、上京直後の状況を直接話法で知ることのできる貴重な証言でもある。この「或雑誌社」については未詳だが、「軟い職業」については、「代々木あたりでカフェエーの女給をして生活費を得る一方創作に精進していた」(中本たか子発狂す 松澤へ入院)『朝日新聞』一九三二(昭和6)年四月十九日)と、文壇デビュー直前期の消息を伝える、事後的な新聞記事を、間接話法ながら見出すこともできる。

そしてこのコラム「新人紹介(4)」で中本たか子は、「思想系統」については、「瞭りした思想系統を持ちません強ひて言へば、唯物論的

立場とでも申しませう(但し、史的弁証法的唯物論ではありません)」と微妙なコメントを残している。実際、一九二九(昭和4)年の中本たか子の軌跡は、横光利一らの新感覚派文学から、ゆつくりとしかし確実に、プロレタリア文学の側へと、移行していく時期に該当していた。

そして同時に、一九二九(昭和4)年は、中本たか子の雑誌メディアへの露出が、爆発的に増大した一年であった。前年に引き続き『創作月刊』には、小説「新聞紙が作った海峡」(二月)、小説「臨時作業」(三月)、随筆「人形町」(四月)を掲載、そして長谷川時雨の主筆する雑誌『女人藝術』には小説「赤」(一月)、随筆「自己紹介」(二月)、小説「鈴虫の雌」(三月)、評論「機械的美感」(四月)、座談会「最近世相漫談会」(五月)への参加、評論「文学の生産と需要」(六月)、評論「文芸月評」(八月)、評論「文芸時評」(九月)、小説「恐慌」(一〇月)、評論「文芸評価の基準——文芸時評」(十一月)と間断なく登場している。

また、新興芸術派作家の多くが集つた新潮社の雑誌『文学時代』には、評論「新進十五作家論 平林たい子論」(八月)、小説「モスクワのミイラ取り」(一〇月)、随筆「嵐」(十一月)、アンケート「来年は何をするか——一九三〇年に対する私の希望・抱負・計画」(十二月)を掲載、そして同じく新興芸術派系の雑誌『近代生活』には小説「朝の無礼」(六月)、随筆「四人の男」(七月)、コント「繁栄の大統領」(十月)、随筆「手の階級性——光の手ほか」(十一月)、評論「収穫の多い本年度の創作界」(十二月)を掲載した。

そして小さなメディアでは、『文藝レビュー』のアンケート「形式主義文学理論を如何に観るか——短信——」(五月)、『文藝都市』での合評「六月号創作評」(七月)への参加を確認することもできる。

これに加えて、小説「胎盤」(『文藝春秋』四月)、コント「午前零

時の文明 自称医学博士とS子」(『中央公論』六月)、随筆「亀戸雑景」(『改造』一二月号)と、第一線の大規模な出版部数を誇る雑誌メディアにも、中本たか子は執筆者として名を連ねることとなった。

老舗文芸雑誌『新潮』には、座談会「男」に就ての漫談会(九月)への参加、特集「十二・尖端人の多角的検討」のささきふさ論「印象派的だ」(十一月)の執筆が見られるが、同じ企画で中本たか子自身が、その十二人のラインナップに検討対象として採り上げられている。川端康成・村山知義・ささきふさ・片岡鉄兵・勝本清一郎・北村喜八・浅原六朗・高田保・中本たか子・林房雄・龍膽寺雄・大宅壮一という順で、本特集は検討記事を掲げたが、中本たか子については、林房雄「中本たか子氏の生活」、平林たい子「中本たか子氏」、そして横光利一「中本たか子氏について」が掲載された。そこで本稿の結びにあたり、長い引用になるが、横光利一が語った印象記の全文を掲げる。

中本君の作を読んだ者はたいていは反抗心を持つやうである。読者に反抗心を起させる作者はそれだけでもどこか豪いのだ。もし中本君の作を賞める人があるなら、その人は文学史に通じてゐる人に相違ない。文学史に通じてゐる者は必ず作家の最大の特長を掴み出すからだ。中本君の作を良いとか悪いとか云ふ前に、先づどの女流作家が我が国の文学史に残るかを考へて見る必要がある。今までに人々のやつて来たことをやるのならばどの作家にだつて出来るのだ。それは別に作家としては賞めたことでも何んでもない。当り前のことなのだ。中本君はやれないことをやらうとすると。すると人は笑ふ。ここまでは作家は芸人と同じことだ。笑はれてゐるより仕様がな。しかし、今に中本君はやれないことまでやれるやうにして丁度であらう。その能力は今の仕事の中に見えてゐる。中本君の一番の特長は今までの女流作家が美しいと思

つてゐたものを捨てて了ひ、汚いと思つてゐたものを美しくしようとしたことだ。今の所、人の汚いと思ふ所のものをすっかり美しくしてゐない。しかし、美しくしかけてゐる。此の冒険はもし中本君が出なければ誰か必ず他の者が變つてすべき筈のものであつたのだ。そこへ中本君が現れた。受難は当然暫くは来るであらう。しかし、中本君の頭は女としては科学的で正確である。その正確さは廻転の速度がすばらしく早くはないが、しかし、すばらしく早いものが停止する所でも停止をしない。此のため中本君は速度の早いものよりいつの間にか遠くへ行つて悠々と廻つてゐる。近頃中本君はマルキシズムへ転換したと云ふ話を聞いたが、これは遅かれ早かれ氏としてはさうあるべき筈だと思つてゐた。別に不思議ではない。しかし、瀬戸際で観察出来得る領分はたつたそれだけであつたのかと思はしめないでもない。まだまだ確に有つた筈だ。過渡期と云ふものは叩かれるしりからぎろぎろと眼を光らせてこそ、作家である。批評家といふものは計算すればそれで良いのだ。しかし、作家は計算したとき、墮落したのだ。中本君は計算をしたのではなくつて清算したのにちがひない。此の計算と清算との差の間を、中本君はどれほど認識したのであらうかと見詰めることは、私には興味がある。総て転換したものの深さと云ふものは、そこに潜んでゐるにちがひないのだ。

一九二九(昭和4)年の終わり頃には、中本たか子は、十分に流行の新進作家になつてゐた。本稿では、その個々の記述の詳細に立ち入る余地はなく、別稿に譲るよりほかないのだが、確かにメディアのなかの中本たか子像は、ある時はモダンズム文学の担い手のように、やがてプロレタリア文学の新進として、揺れ動きながら、その爆発的な活躍の痕跡を提示していると言ふことができるようだ。そして横光利

一「中本たか子氏について」は、一九二九へ昭和4年の雑誌メディアに乱反射する、中本たか子の印象を総合しつつ再構成する、という記述戦略を選択している。そしてもちろん、かつての個人的な書簡の往復については、微塵も窺わせることのない、実に禁欲的な印象記として提示されている。

本稿の執筆作業では、横光利一と中本たか子が直接対面したことを明らかにする資料を、いまだ発見できていない。この二人が実際に対面することがあったのだとして、それは一体いつのことで、果たしてそこではどのような言葉が交わされたのだろうか。

附記

一九二九へ昭和4年の中本たか子の執筆状況については、小田切進編『現代日本文藝総覧』全四巻（一九六九〜一九七三年、明治文献）、中央公論社編『中央公論総目次』（一九七〇年一月、中央公論社）、関忠果・小林英三郎・松浦総三・大悟法進共編『雑誌『改造』の四十年 付・改造目次総覧』（光和堂、一九七七年五月）、『文芸春秋三十五年史稿』（一九五九年四月、文芸春秋新社）等を参照し、随時、原誌とその複写に当たりつつ調査を行った。しかしながら、中本たか子の書誌情報は、十分に整備されていない状況であり、当然この調査にも遺漏があると思われる。

また、横光利一研究者である十重田裕一氏に原稿を一覧いただき、有益な助言をいただいた。記して謝辞としたい。

（日本近代文学）

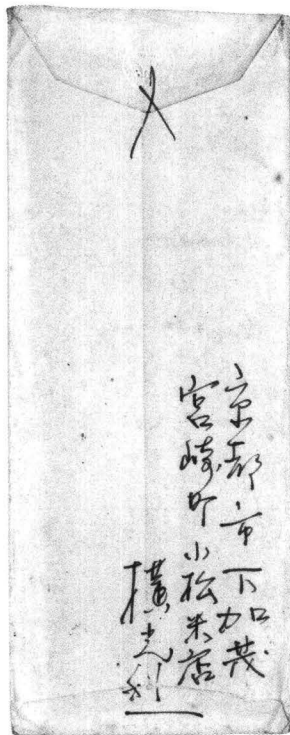


図2 封筒裏

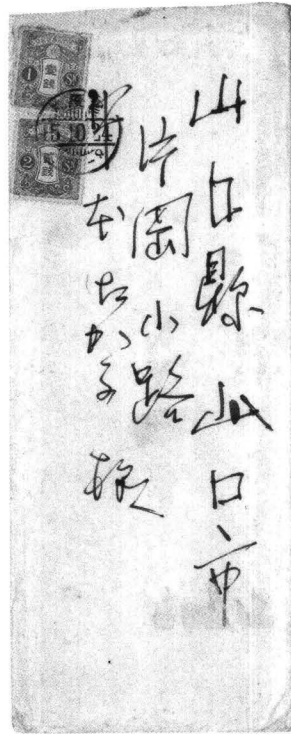


図1 封筒表

